c プロジェクト報告会

日時：2024年2月3日（土）13:30開場、14:00開演、16:30終了
会場：京都芸術センター講堂

TAROが取り組んでいるプロジェクトについて報告会を開催しました。
二部はテーマを設定し、解説・上演いただくことで、幅広く事業を発信しました。

一．伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムの進捗・報告会

【令和３年度採択事業】
**「三味線音楽のScratch教材開発：
常磐津節を通じて日本の伝統芸能に親しむための教育プログラムづくりとその普及の試み」**
発表者：重藤暁（次代に邦楽をつなぐプロジェクト）

【令和４年度採択事業】
「社・東条を中心とした播州音頭踊りの継承と発信プロジェクト」
発表者：京極朋彦（京極WORKS）、中原公寿（社播州音頭踊り保存会）

「若手へ向けた鯖江人形浄瑠璃の技能継承と他地域との交流」
発表者：栗山祐子（鯖江人形浄瑠璃「近松座」）

【令和５年度採択事業】
「郷土芸能の若手継承へ向けたネットワークの構築と発信手法の探索」
発表者：浅野高行（京都郷土芸能「活性化してやろう」会）

二．写し扇製作の工程について知ろう！
若手継承が途絶えない石見神楽　小中学生による石見神楽の上演！

「写し扇の製作工程について」
解説：福井芳宏（有限会社 十松屋福井扇舗）

「若手継承が途絶えない石見神楽　～浜田市の取り組みから考える～」
解説：中谷雅晴（石見神楽産業化モデル事業実行委員会）

石見神楽上演 演目「恵比須」「八幡」
出演：西村子供神楽社中（島根県浜田市）

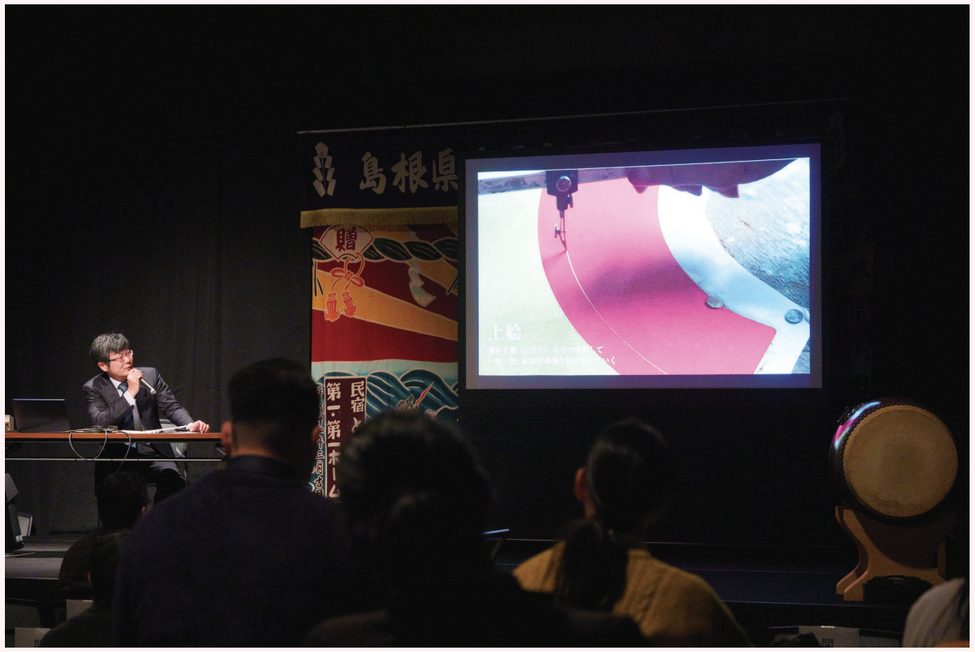
撮影：大島拓也

伝統芸能文化創生プロジェクトの事業の一つである、プロジェクト報告会を4年ぶりに開催しました。第一部の伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムの進捗・報告会では、今年度どのように事業を進めてきたか、そして今後の予定や展望を各団体が発表しました。

まず、「三味線音楽のScratch教材開発：常磐津節を通じて日本の伝統芸能に親しむための教育プログラムづくりとその普及の試み」の重藤暁さんは、日本の小・中学校の音楽授業の現状と課題を取り上げ、開発した教材を使って、いくつかの小・中学校で研究授業を行った様子が報告されました。そもそも、1977年の学習指導要領に「我が国の音楽」が追加され、2018年の改訂では日本の楽器で表現・創作する要素が求められるようになりましたが、実際はビデオでの鑑賞がメインであり、多くの学校は三味線が無い状態です。本事業ではGIGAスクール構想に伴い、必修となったプログラミングに使用してもらえる教材（Scratch）を開発し、今後も研究授業の中で「三味線らしさ」「常磐津らしさ」を追求できるような教材の開発に取り組んでいく予定です。

「社・東条を中心とした播州音頭踊りの継承と発信プロジェクト」は、二つの播州音頭踊り保存会のコーディネートを担う京極朋彦さんにより、今年度の活動として、2回の播州音頭通信の発行、音頭と踊りの映像によるアーカイブ記録、5月に開催したワークショップおよび8月に開催した播州芸能踊り大会の開催などを通して、広域に広がる芸能との繋がりが報告されました。加えて、社播州音頭踊り保存会の代表が80代から40代に代替わりしたことや、今後もアーカイブ化を進める中で、保存・継承・発展の観点から事業を進めていくと締めくくりました。

「若手へ向けた鯖江人形浄瑠璃の技能継承と他地域との交流」では、栗山祐子さんより、10月に開催した「私たちの人形浄瑠璃について語る」を通して、他地域の取り組みを知ったことで自身の取り組みの特徴や現状を客



撮影：大島拓也

観的に見つめるようになったことが報告されました。さらに現在の取り組みとして、若手世代の座員へ向けた媒体として、手書きで継承されている楽譜をアプリでグラフィックとして書き起こし、その楽譜を映像に映す動画を作成中であることを発表しました。近松座は発足17年の若い団体であり、伝統がないからこそ様々な団体の取り組みを吸収していきたいと話し、今後も伝統にこだわらずYouTubeなどで手軽に自主練習ができることを目標に、取り組みを展開していくとのことです。

最後に、今年度採択の「郷土芸能の若手継承へ向けたネットワークの構築と発信手法の探索」では、京都郷土芸能「活性化してやろう」会の浅野高行さんより、多くの芸能が課題とする次世代の担い手養成及び発掘へ向けて、各芸能団体が定期的に集い交流する場として「民俗芸能交流会」を始めたことが発表されました。12月に開催した第一回では課題を抽出し、3月に第二回をする開催するなど定期的に交流会を行うことで、今後は郷土芸能の在り方を様々な観点から考えながら、取り組みを進めたいとしています。

第二部の福井芳宏さんの「写し扇の製作工程について」では、古物重厚意匠糊地能楽扇がどのような観点から重厚意匠であるかについて、図柄の面では「能中啓 クロ骨仕立 糊地本金製 重き花戦花車図」を取り上げ、職人技法の多さから「井上流 シロ骨仕立 糊地本金製」を例にお話いただきました。重厚意匠な扇は材料の高騰や職人の減少などから製作が難しく、「写し扇」を作成することで維持継承を目指し取り組んでいると語られました。普段、写し扇の製作過程を知る機会がないため、その工程や製作の際に職人さんと作り手が考えるポイントなど、扇についての知識を深めるきっかけとなりました。

「若手継承が途絶えない石見神楽　～浜田市の取り組みから考える～」では中谷雅晴さんより、人口約5万人の島根県浜田市においてどのようにして石見神楽を長年継承してきたか、中谷さん自身が市職員であった経歴も踏

撮影：大島拓也

まえて、産業や行政の取り組みも交えてお話いただきました。浜田市の子どもたちは幼い頃からごっこ遊びで神楽に親しみ、高校生になると郷土芸能部として石見神楽に日々取り組む環境や、衣装や面、蛇を製作する職人さんとの連携や障がいのある方への就労支援など、石見神楽という芸能と生活、産業の深い密着性を知ることができました。継承面においては、今までは神楽の笛のリズムや音色を耳のみで覚えてきたが、笛の継承者が減少していることより、もっと簡単に覚えるために楽譜を作り、神楽の演目を歌詞にした唱歌を作成したことで、小学生が半年程度で笛を演奏できるようになったと発表しました。また、石見神楽が流行することは良いが、先人を敬いつつ盲目的に模倣しない、いわゆる劣化コピーを招かないことが重要であると語りました。

最後に、石見神楽の実演では、小中学生による「恵比須」「八幡」が上演されました。「恵比須」の演じ手の小学生は、今回が「恵比須」のデビューにも関わらず、会場を笑いに巻き込み盛り上げました。また、「八幡」は大人顔負けの演技で、その気迫に会場は熱気に包まれました。笛奏者は唱歌によって学んできた小学生で、太鼓とともに石見神楽の旋律を奏でていました。

4年ぶりに対面にて開催した、伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム「プロジェクト報告会」ですが、会場には古典芸能や民俗芸能の実演家、道具や材料に興味を持つ方などが集まっており、TAROの取り組みを知っていただくとともに、開催後に交流することができました。この出会いが各分野に繋がっていくことを期待しています。現在、各分野において若手世代の芸能継承が課題となっていますが、浜田市の小中学生による石見神楽の舞台も合わせて観ていただいたことで、若手が真剣に芸能に向き合うことの素晴らしさや、その背後にある一定の忍耐強さのようなものを感じていただけたのではないかと思っています。

d 相談窓口

TAROでは、伝統芸能文化に係る相談窓口を設置しています。芸能の演者、支える人、関心のある人など、どなたからでも相談を受け付けています。

質問・相談者

アーティスト	20
実演家（古典芸能）	52
実演家（民俗芸能）	39
職人	10
研究者	30
一般	21
学校	1
企業	30
団体・公共施設	76
市町村（地方自治体）	29
メディア・プレス	15

（件）

連絡方法

電話	70
メール	112
対面	137
オンライン	4

（件）

地域

京都府内	180
京都府外	139
その他	4

（件）

質問・相談内容

TARO の活動について	77
取材依頼	19
復元・活性化共同プログラムに関する質問	87
映像撮影・配信に関する相談	1
活動・取組の相談	119
その他	20

（件）

（2023年4月1日から2024年3月7日現在）**323件**

質問・相談例

海外で作品を上演する際に、契約や交渉で気をつけた方がいい点があれば教えてほしいです。（古典芸能実演家）

古典芸能の映像の著作について教えてほしい。（アーティスト）

古典芸能の公演周知先や PR 方法について教えてほしい。
また企画立案する際に気をつけた方が良い点などもあれば教えていただきたい。（団体・公共施設）

日本文化を紹介するために、能の動画撮影を行いたい。
受け入れてくれる機関や人に繋いで欲しい。また撮影の際にアドバイスが欲しい。（企業）

失われてしまった行事を復活したいと考えている。
他にそのような事例はないか。（団体・公共施設）

海外からアーティストが京都に滞在するが、能の謡を体験したいと言っている。
どこを案内していいのかわからないので、アーティストの作品の話を聞いていただき、相談に乗って欲しい。
（団体・公共施設）

海外から京都に滞在しているアーティストが伝統的な楽器を購入したいと言っている。
どこを案内すればよいか。（団体・公共施設）

民俗芸能および行事に関わる若手の後継者が減っている。
他の芸能ではどうか？様子を教えてほしい。（民俗芸能実演家）

柳川三味線の胴皮を和紙で開発されたと聞いた。
他の三味線への応用は検討されているか？
また和紙の胴皮は現在購入することができるか？（古典芸能実演家）

自社で開発した映像カメラやシステムを、
芸能普及や発信に役立てたい。
何か連携していくことができないか。（企業）

当方で楽器の展覧会を開催するが、ぜひ TARO さんで取り組まれた和紙による胴皮の
開発のプロセスを取り上げたい。資料提供などをお願いしたい。（団体・公共施設）

古い太鼓があるが、太鼓の歴史に詳しい方をご紹介いただきたい。（メディア・プレス）

九州のとある神楽で、演目を復活させる仕事に取り組んでいるが、
その地域にとって有効となる記録手法や媒体とは何か。アドバイスがほしい。（民俗芸能実演家）

伝統芸能と観光を結びつけていくための課題は何か。（企業）

地域の公共団体より、民俗芸能を紹介する取り組みを検討してほしいと言われている。
他地域の芸能にも声がけしたいので繋いでいただきたい。（民俗芸能実演家）

来年度竣工予定の施設運用に際し、TARO の機関や取り組みがとても参考になると感じている。
具体的な運用方法など詳しく教えてほしい。（企業、市町村）

海外で演奏する機会があるが、三味線を持ち出すことが困難なので、
和紙なら持っていきやすいのではと思い、連絡した。流通しているか。（古典芸能実演家）

過去に「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」に応募し、採択に至らなかったが、
その後の取り組みを知っていただきたく、京都にきた。（民俗芸能実演家）

京都に留学しているが、能や狂言を鑑賞する際、どこを見ればいいか。情報を教えてほしい。（一般）

伝統芸能や神事で使用される蓑の現状について教えてほしい。（メディア・プレス）

e 参加・協力事業

【参加事業】

○ 文化庁移転記念「日本の技フェア」

日時：2023年11月18日（土）～11月19日（日）
会場：京都市勧業館 みやこめっせ 第三展示場

主催：文化庁
共催：全国文化財保存技術連合会

――

「文化財の保存技術」は伝承者の養成や原材料の確保などが困難になりつつあり、継承の危機に瀕しています。日本の技フェアでは文化財の保存技術を紹介することで、それらの現状や文化財の保存技術の大切さを多くの方々に理解していただくとともに、文化財の保存技術の未来の伝承者・理解者の拡大等に資することを目的に毎年各地で開催されています。
今年度は文化庁の京都移転を記念して京都で開催され、TAROも初めてブースを出展しました。現在取り組んでいるプロジェクトの紹介に加え、和紙による柳川三味線の胴皮開発と新素材による鉦すりの開発を中心に展示しました。
両日、祇園祭の山鉾である北観音山保存会と南観音山保存会の方をゲストに、新素材による鉦すりの体験を行ったことで、子どもから大人までTAROの取り組みを発信することができました。

○ 企画展「京都の祭り行事」

日時：2023年12月1日（金）～2024年1月18日（木）
会場：京都府立京都学・歴彩館 京都学ラウンジ

主催：京都ふるさと伝統行事普及啓発実行委員会
共催：京都市

――

文化庁「令和5年度文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）」の助成を受けて実施している「京都の文化遺産総合活性化事業」の企画展に、TAROが過去の採択事業で取り組んだ「柳川三味線のための胴皮新素材開発」と「新内節の発信と保存プロジェクト」の様子を寄稿しました。

【協力事業】

○ 特別展「どうする江戸の音楽 天下泰平の世に花開いた楽器 三味線」

日時：2023年7月15日（土）～12月12日（火）
会場：浜松市楽器博物館 地下展示室 企画展エリア（メイン展示）
　　一階展示室 日本エリア（サテライト展示）

主催：公益財団法人浜松文化振興財団、浜松市

――

TAROは展示協力として、伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム「柳川三味線のための胴皮新素材開発」（平成30年度採択事業）で共同開発した、和紙胴「響」のプロセスを発信しました。展示室内のスクリーンでは、和紙胴「響」のお披露目会の映像を上映し、従来の胴皮と和紙胴「響」の柳川三味線の音を比較していただきました。さらに、開発した和紙胴を展示することで多くの方に発信する展示となりました。

○ 落語会の開催

日時：2023年11月22日（水）17:30開演
会場：京都市中京区役所
出演：桂よね吉、桂二豆
演目：落語解説　桂よね吉
　　落語「時うどん」桂二豆
　　落語「皿屋敷」桂よね吉

――

落語会の開催を検討しているという相談を受け、アーティストと繋ぎました。

f ウェブサイトと YouTubeチャンネル運営

TAROの最新ニュースやイベント情報を掲示しているだけではなく、伝統芸能文化に関する記事、
過去事業の記録を動画と文章で随時投稿しています。

○ ウェブサイト　http://www.traditional-arts.org/

TAROの最新ニュースやイベント情報を掲示しているだけではなく、伝統芸能文化に関する記事や、過去事業の記録を動画と文章で随時投稿しています。ウェブ相談窓口では、伝統芸能文化に関する相談、伝統芸能文化復元・活性化共同プログラムに関する相談、イベントに関するお問い合わせ等を受け付けています。いつでも気軽にアクセスできるウェブサイトが皆さんと繋がる第一歩となります。また、TAROの年度事業報告書や、「伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」の各種発行物、「伝統芸能文化センター」設立に向けた京都市と京都芸術センターの取り組みをまとめた冊子「伝統芸能文化センターの実現を目指して」もダウンロードできます。

3. 実施事業
f. ウェブサイトと Youtube チャンネル運営

○ You Tube チャンネル　https://www.youtube.com/@user-no4iq2oz1n

これまでのTAROのYouTubeチャンネルは主に、過去に実施した講演やシンポジウムなどの映像記録を公開するための場でしたが、ウェブ向けに作成した動画コンテンツを配信するための場として活用しています。

○ 公式 LINE　@taro_kyoto

多くの世代の方々にリアルタイムで情報を届けるために、LINEの公式アカウントを作成しました。TAROのイベント情報やプロジェクトのプロセスなどを配信、今後もコンテンツを増やしていく予定です。

g 伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議委員より

TARO は、伝統芸能に関する専門家からの意見を仰ぐ機会として伝統芸能文化創生プロジェクト推進会議を設置しています。

伝統芸能文化創生
プロジェクト推進会議委員

久保田裕道（東京文化財研究所 無形文化遺産部 無形民俗文化財研究室長）
小林昌廣（情報科学芸術大学院大学 教授）
竹内有一（京都市立芸術大学 教授）
西岡陽子（大阪芸術大学 名誉教授）
廣岡青央（京都市産業技術研究所 プロジェクト推進室 副室長）
広瀬依子（追手門学院大学 国際教養学部 講師）
吉田純子（文化庁 文化財第一課 芸能部門 主任調査官）
砂川敬（京都市 文化芸術政策監）

○コロナ禍明けの民俗芸能・祭礼

久保田 裕道

2023年は、コロナ禍がようやく落ち着いた年になった。5月8日に、それまでの「新型インフルエンザ等感染症」（いわゆる2類相当）から「5類感染症」へと移行し、感染者への外出自粛要請がなくなったことで、多くの民俗芸能や祭礼が復活を果たすことができた。

特にコロナ明けを実感したのは、5月3日に滋賀県竜王町山之上で行われた「ケンケト祭り長刀振り」であった。コロナ以前の復活に加えて、前年にユネスコの無形文化遺産に「風流踊」として記載されたことから、記念式典も開かれた。記念の饅頭が配られ、また祭礼行列の神幸時には普通に酒肴が振る舞われていたことも、コロナ禍を思えば隔世の感がある。

このように、ユネスコの無形文化遺産への記載後初めての祭礼を迎えた各地の風流踊は、記念開催といった扱いにしたところもあり、各地で盛り上がりを見せたようでもある。奈良県十津川村の「十津川の大踊」を含む盆踊りは、コロナ禍の間ずっと休止状態であったが（2022年は非公開ながら1地区だけが短い時間踊った）、ようやくの復活となった。しかし折悪しく台風が襲い、地区によっては中止せざるを得なくなっている。それでも大踊を伝承する3地区のうち、西川地区は11月19日の近畿・東海・北陸ブロック民俗芸能大会（京都府）に、小原・武蔵地区は11月25日の全国民俗芸能大会（東京都）に出演した。特に全国民俗芸能大会は、2020年・2021年と出演を打診しながらも大会自体が休止となって実現せず、4年超しの出演となった。

ただし、夏の段階では未だコロナ禍が継続していたことも事実である。特に、夏にかけて第9波といわれた流行では、外出自粛要請はなくとも発熱等により出演できなくなったというアクシデントは、各地の民俗芸能や祭礼で起きていたようである。旧暦8月十五夜に訪れた沖縄県の久米島では、兼城（かねぐすく）地区で4年ぶりに「十五夜村（じゅうごやむら）あしび」が行われ、獅子舞を始めとする芸能が披露された。ただ体調を崩して参加できない者も出たために、当初予定していた配役通りにはならなかったという。それでも、ようやく開催できた久々の祭りは、その意義を改めて気づかせてくれたといえる。

しかしその一方で、コロナ禍による中止から、そのまま活動を休止させたという例も、決して少なくはないようである。静岡県のある獅子舞を訪れるべく、地元の教育委員会に電話で問い合わせてみると、「やっている」という。それで現地を訪ねてみたのだが、集まって太鼓は叩いているものの、獅子舞はやらなかった。聞けば、若者が少なくコロナ禍前から危ぶまれていたが、コロナ禍の休止を経て、ついに再開できなくなったという。

同じような例に、報道で紹介された岐阜県飛騨市の「数河獅子（すごうじし）」がある。県指定の有名な獅子舞であったが、2023年を最後に、休止を宣言したのである。報道によれば、20年程前には30名いた演者も現在は9名。45歳のリーダーは、後輩がいないので今年を最後にしたとのことであった。

さらに衝撃的であったのは、11月3日に静岡県伊豆の国市で発生した山車横転の事故である。祭りの山車が下り坂で暴走して転倒、死者1名とけが人を出すという惨事となった。報道の限りでしか知り得ないが、操作が不十分だったとの推測がある。それもコロナ禍の中止で、経験者が少なくなっていたからではないかという。3～4年のブランクが民俗芸能や祭礼に及ぼしたリスクは、かなり大きなものといえよう。

兼城十五夜村あしび（沖縄県久米島町）

12月になっても、衝撃的な休止のニュースが駆け巡った。はだか祭として知られる岩手県奥州市に伝わる黒石寺の蘇民祭が、2024年2月の催行を最後に、休止を決めたというのである。報道では、関係者の高齢化と担い手不足によって維持困難と判断されたのだという。住職の言として、外部の人に手伝いを頼めばできなくもないが、それは本来の祭りではないとのことであった。

反対に、変化させてでも継続させようと奮闘している例も見られる。同じはだか祭ながら、愛知県稲沢市の「国府宮はだか祭」では、2024年2月の催行から女性の参加を認めた。報道によれば、衰退を防ぐために、一人でも多くの人に参加してもらいたいという思いからそうしたのだという。その是非はともかく、継承のために変容を認めざるを得ないところ、あるいは時代にあわせて積極的に変容しようとするところも出てきているのだ。

このように、コロナ禍での中止期間を経た民俗芸能や祭礼には、さまざまな問題が発生している。コロナ禍による休止・変容は一時的なものであったはずだが、いざ明けてみれば、多く恒久的な休止・変容へと姿を変えていたのである。しかも困ったことに、そうした実態を把握し、検証するだけの体制もない。人知れず、民俗芸能や祭礼が消えてしまうことのないよう、何ができるのかを早急に考える必要がある。

※この原稿執筆後に令和6年能登半島地震が発生した。被災地域には数多くの祭礼・民俗伝統が伝承されており、これから地域の復興とともに、そうした伝統芸能継承への支援も必要とされよう。